

第9回甲子園塾

日本高等学校野球連盟主催 甲子園塾報告書

日時：平成28年11月18日（金）～20日（日）

会場：中沢佐伯記念野球会館・兵庫県尼崎工業高等学校

長野県軽井沢高等学校

野球部監督 漆原 伸也

目次

1. はじめに	p 3
2. 事前課題	p 4 ~ p 5
3. 第一回甲子園塾の概要	p 6
4. 受講者名簿	p 7
5. タイムスケジュール	p 8
6. 座学	
6-1 都道府県連盟の役割	p 9 ~ p 13
6-2 アンチ・ドーピングについて	p 14 ~ p 16
6-3 指導者としての基本的な考え方 (北海高校監督 平川 敦氏)	p 16 ~ p 21
6-4 指導者としての基本的な考え方 (元中京大中京監督 大藤 敏行氏)	p 21 ~ p 23
6-5 部員とのコミュニケーションの図り方	p 23 ~ p 26
6-6 不祥事の取り扱いと防止について	p 26 ~ p 27
6-7 部活動の役割と課題	p 28 ~ p 30
6-8 日本の球史	p 31 ~ p 33
6-9 今後、野球人口を増やすために	p 33 ~ p 35
7. 班別討議	
7-1 新入部員の指導について	p 35 ~ p 37
7-2 体罰についてどう考えるか	p 37 ~ p 40
8. 実技	p 40 ~ p 47
9. 閉校式	p 48
10. 終わりに	p 49 ~ p 50

1. はじめに

軽井沢高校に赴任し、野球部の監督に就任してから5年目を迎えました。就任当時から、チームを強くし、県大会を勝ち上がり、そして甲子園へという思いを強く持ち続け活動し現在に至りますが、思いとはかけ離れた人数不足という状況に悩み続けながらも活動をしています。

監督に就任し、単独チームで試合に参加できたのは、一回のみです。その一回も学校内から素人の生徒を含めて出場し、42対1という大敗を喫しました。自分の考えの甘さと未熟さを痛感し、それ以降、その悔しさをバネに活動を続けてきております。そんな中、恩師の草間先生が率いていた臼田高校、他地区でありながら合同チームを快く組んでくださった屋代南高校、北部高校、中条高校と合同チームという形で、本校単独では9人に満たない状況でも8回、公式戦に参加するチャンスをいただきました。また、今年の夏の大会の開会式では、本校唯一の三年生である磯山洋介に先導と始球式という大役を任せいただきました。夏の大会には出場できなかったわけですが、その先導と始球式をご覧になられた企業の方の目に留まり、就職につながりました。

人数不足という状況の中でも、軽井沢高校の活動を支えてくださる長野県高等学校野球連盟の皆様には本当に感謝しております。

そして今回も日本高等学校野球連盟主催「第9回甲子園塾」を受講させて頂く機会を与えていただき、心より感謝の気持ちを感じております。甲子園塾を受講し、新しい知識を吸収できたことは勿論、今まで確信が持てなかつたことが確信できたり、自信を持てたり、そして新しい繋がりを築けたりとかけがえのない三日間となり、非常に嬉しく思います。また、そのような経験ができたことを、レポートで報告するだけでなく、現場でも生かしていく、これから還元していきたいと思います。

私にこのような機会を与えてくださった、日本高校野球連盟の方々、講師の方々、長野県高校野球連盟の皆様に心より感謝し、本報告書での挨拶とさせていただきます。

2. 事前課題

甲子園塾参加の前に、参加者には事前課題が与えられる。その課題は講師の先生方はもちろん、受講生全員が目を通すことになる。私も参加の前に26人の事前課題に目を通したが、考え方と同じ受講生もいれば、「なるほど」と新しい視点での考えを知ることができ非常に良かったと感じた。参考までに、私自身の事前課題もレポートに載せておくので、興味があれば目を通していただきたい。

都道府県名 長野県
学校名 軽井沢高等学校
氏名 漆原 伸也

① ご自身の指導者としての基本的な考え方について

指導者として、将来社会に出て通用する人物を一人でも多く育てるということを一番の目的として、日々指導をさせていただいている。人を育てるためには、まずは自分自身が成長していくということを忘れてはならないと感じており、自分が正しいと思うこと、当たり前に思っていること、見えている世界が全てではないということを忘れず、様々なことから学び、成長していく謙虚な姿勢が大切だと思っている。指導者にできることは限りがあるかもしれないが、その中でも生徒のために何ができるかを考え、悩み、見極め、出した結論を信じて全力を尽くすことが、生徒のためにも、世の中のためにも、そして最終的には自分のためにも繋がっていくと信じて指導をしている。

また青年海外協力隊員として野球指導をするためにスリランカに渡航し、三年間を過ごした経験や、感じてきたこと、日本に戻って感じることができた日本の素晴らしさを、高校野球という現場で生徒に伝えながら、自分が多くの人に支えられ得てきたものを還元していきたい。

② 3年間野球部を継続するために、新入部員に対して特に注意して指導していること

入部をして野球を一生懸命頑張るのはもちろんのこと、それ以外の部分、特に学校生活に対する指導を入学当初から注意して行っている。普段の授業への取り組み、学校内外での挨拶、制服の着こなし、課題提出、クラスへの貢献、毎日の掃除など、野球以外のことに対してしっかりと取り組めて初めて人間としての成長があり、それが野球上達の大きな基盤になるということを、特に新入生には様々な場面で伝えるようにしている。学校での様子はHR担任、教科担任など、多くの先生方と情報交換をして、できるだけ把握するように心がけている。最終的に、指導を通して、生徒自身が、「日常が全て」ということを認識し、自分たちで進んで行動できるようになるということを目指している。

新入部員は受け身になりがちなので、部活や日常生活の中でも最終的な目的や目標などを自分で考え、計画的に動く習慣を身につけさせることに重点を置いている。自ら考えて動くということから主体性が生まれ、モチベーション維持に繋がり、活動を継続させていく基盤になる。

③ 部員とのコミュニケーションを図るうえで、どのような点に気をつけているか

軽井沢高校赴任当初、未熟さゆえに今までの自分の経験則からの決めつけや一方的な考えで判断してしまうことがあり、それが原因で生徒とぶつかったり、思うように伝えることができないという失敗を多く経験をしてきた。そのため、生徒がどうしてそう考えたのか、どうしてそういう行動に出たのかという原因や理由をしっかりと想え、決めつけや一方的にならないようなコミュニケーションを心がけている。また、本校は、まだまだ理解する力や表現する力が発展途上にある生徒が多いため、生徒に話している内容や要点が伝わるように、理解して当然という思い込みに気を付け、分かり易い言葉遣いや表現を選ぶようにしている。そして一番は生徒からの発話を大切であると思うので、それを引き出すようなコミュニケーションを大切にしている。生徒の発話を引き出すには、時には我慢が必要である。指導者側が我慢できないと、生徒が考える機会を奪い、または指導者の正解ばかり探すということに繋がる恐れがあるので特に注意している。

④ 保護者との対応でどのようなことに気をつけているか

私が高校生だった頃の保護者に対する印象は、野球の活動に理解を示し、適度な距離でサポートをしてくれていたというものだった。しかし、監督に就任してからは、それが当たり前ではないということを感じることが多くなったということもあり、何か心配なことがあったり、親が不安に思いそうなことがあれば、直接連絡をし、説明をするようにしている。特に家庭でも理解し、協力してもらわなければいけないことに関しては、保護者にも十分に説明する必要があるので、生徒を通して伝えるだけでなく、こちらから保護者会に出席した際や、直接電話するなどをして対応をするようにしている。また、何事も生徒の成長のためという目的をしっかりと伝え、理解してもらい協力してもらうようにしている。保護者に関しても一方的にならないように気を付けなければならないし、逆にグラウンドレベルの話では、ある程度距離を取って活動しなければならないと思う。また、部長や顧問との密な連携も必要になるので、よく相談しながら対応するようにしている。

⑤ 体罰は厳禁ですが、あなたの心構えは

体罰のみならず、一方的に怒鳴り、理不尽なペナルティを与えるといったような指導を私自身は絶対に行いたくないし、そういう指導にならないように常に勉強していく必要がある。できないのは生徒が悪いと怒るのではなく、その生徒に合った指導ができているかどうかを常に考えていれば、体罰はもちろん、理不尽な指導は無くなっていく。もちろん時には叱ることも大切である。しかし、腹が立ったから怒るといった行為は、感情がコントロールできておらず、感情的になればなるほど、冷静な判断はし辛くなってしまう。そういうことがないようにアンガーマネジメントを普段から大切にする必要がある。何か指導が必要になる生徒の行動や言動がどのような心理からきているか、何が原因なのかということを探つていけば、必ずそのことに対してのアプローチの仕方が見つかってくる。そして、そのアプローチの方法の中に体罰という選択肢は私には無い。体罰を行うことによって、自分自身が今までしてきた指導や考え方が全て崩れてしまうし、絶対しないと決意している。

3. 平成28年度 第一回甲子園塾の概要

1. 趣旨 ① 高校野球のよき指導者となるために、高校野球の歴史、指導者としての心構え、指導方法などの研修する。
② 受講者同士の交流を深め、研修者としてのネットワークづくりの一助とする。
③ 都道府県連盟とのより良い関係について研修する。
2. 講師 塾長 山下 智茂（元技術・振興委員会副委員長、星稜高等学校野球部名誉監督）
大藤 敏行（技術振興委員会委員、U-18 全日本代表チーム ヘッドコーチ）
平川 敦（北海高校監督）
馬場 光仁（滋賀県高校野球連盟理事長）
西岡 宏堂（日本高等学校野球連盟副会長）
3. 会場 講義：中沢佐伯記念野球会館
実技：兵庫県立尼崎工業高校
4. 日程 平成28年11月18日(金)、19日(土)、20日(日)

4. 受講者名簿

土清水 賢一	(北海道)	北海道留萌高等学校	監督
柴田 裕介	(青森)	県立弘前中央高等学校	責任教師
高橋 凌	(山形)	県立酒田西高等学校	監督
皆川 俊哉	(福島)	県立小野高等学校	監督
高田 繁	(群馬)	県立桐生西高等学校	監督
土屋 一徳	(埼玉)	県立鳩山高等学校	監督
滝口 健太	(千葉)	県立野田中央高等学校	監督
角崎 高志	(東京)	都立修徳高等学校	責任教師
伊藤 圭太	(神奈川)	県立横浜立野高等学校	責任教師
漆原 伸也	(長野)	県立軽井沢高等学校	監督
中野 祐輔	(富山)	県立石動高等学校	監督
城谷 侑輝	(福井)	北陸高等学校	責任教師
中田 雄太	(愛知)	県立刈谷工業高等学校	監督
牧野 友博	(三重)	県立南伊勢高等学校	監督
上野 走大	(滋賀)	県立栗東高等学校	監督
吉岡 成郎	(奈良)	県立郡山高等学校	監督
富樫 英夫	(大阪)	太成学院大学高等学校	責任教師
八木 一真	(兵庫)	県立西宮北高等学校	責任教師
伊丹 健	(岡山)	県立倉敷商業高等学校	顧問
平田 大介	(広島)	県立呉商業高等学校	監督
白石 竜也	(山口)	県立宇部西高等学校	責任教師
山本 篤志	(愛媛)	済美平成中等教育学校	監督
森 裕嗣	(高知)	県立安芸高等学校	監督
田久保 賢太	(佐賀)	県立唐津東高等学校	責任教師
仲西 洋樹	(大分)	県立大分豊府高等学校	責任教師
萱野 浩介	(宮崎)	県立延岡高等学校	監督
川上 琢也	(沖縄)	県立名護高等学校	顧問

5. タイムスケジュール

第一日目（11月18日）

時間	講習内容	講師担当（敬称略）
13:00～13:30	開校式	山下
13:30～14:15	座学I 都道府県連盟の役割	馬場
14:20～15:20	座学II アンチ・ドーピングについて	諸越
15:20～16:05	座学III 指導者としての基本的な考え方	平川
16:10～16:55	座学III 指導者としての基本的な考え方	大藤
17:05～18:05	座学IV 部員とのコミュニケーションの図り方	山下、大藤、平川
18:05～18:50	食事	
19:00～19:50	班別討議 ①新入部員の指導について	
20:00～20:20	各班の報告、全体討議	
20:20～21:00	座学V 不祥事の取り扱いと防止について	西岡

第二日目（11月19日）

時間	講習内容	講師担当（敬称略）
8:00～8:45	座学VI 部活動の役割と課題	馬場
9:30～11:30	実技I キャッチボール、トスバッティング	山下、大藤、平川
12:15～14:00	実技II 内野・外野ノック、内外連携	山下、大藤、平川
14:15～15:15	実技III (バッティング)	大藤
15:15～16:15	実技IV (ピッ칭)	平川
17:10～17:55	座学VII 日本の球史	井本
18:10～19:00	班別討議 ②体罰についてどう考えるか	
19:00～19:45	各班の報告、全体討議、講師からの助言	

当日は、雨天のため内容に変更があり、実技ができなくなった分時間が余り、「今後野球人口を増やすためには」という内容の討議が行われた。

第三日目（11月20日）

時間	講習内容	講師担当（敬称略）
9:00～9:30	座学VIII チーム・個人用具の管理	山下
9:30～10:30	実技V 走塁の基本	山下、大藤、平川
10:40～12:00	実技VII ノックの実践練習	山下、大藤、平川
12:00～12:15	質疑応答	
13:00～	閉講式	

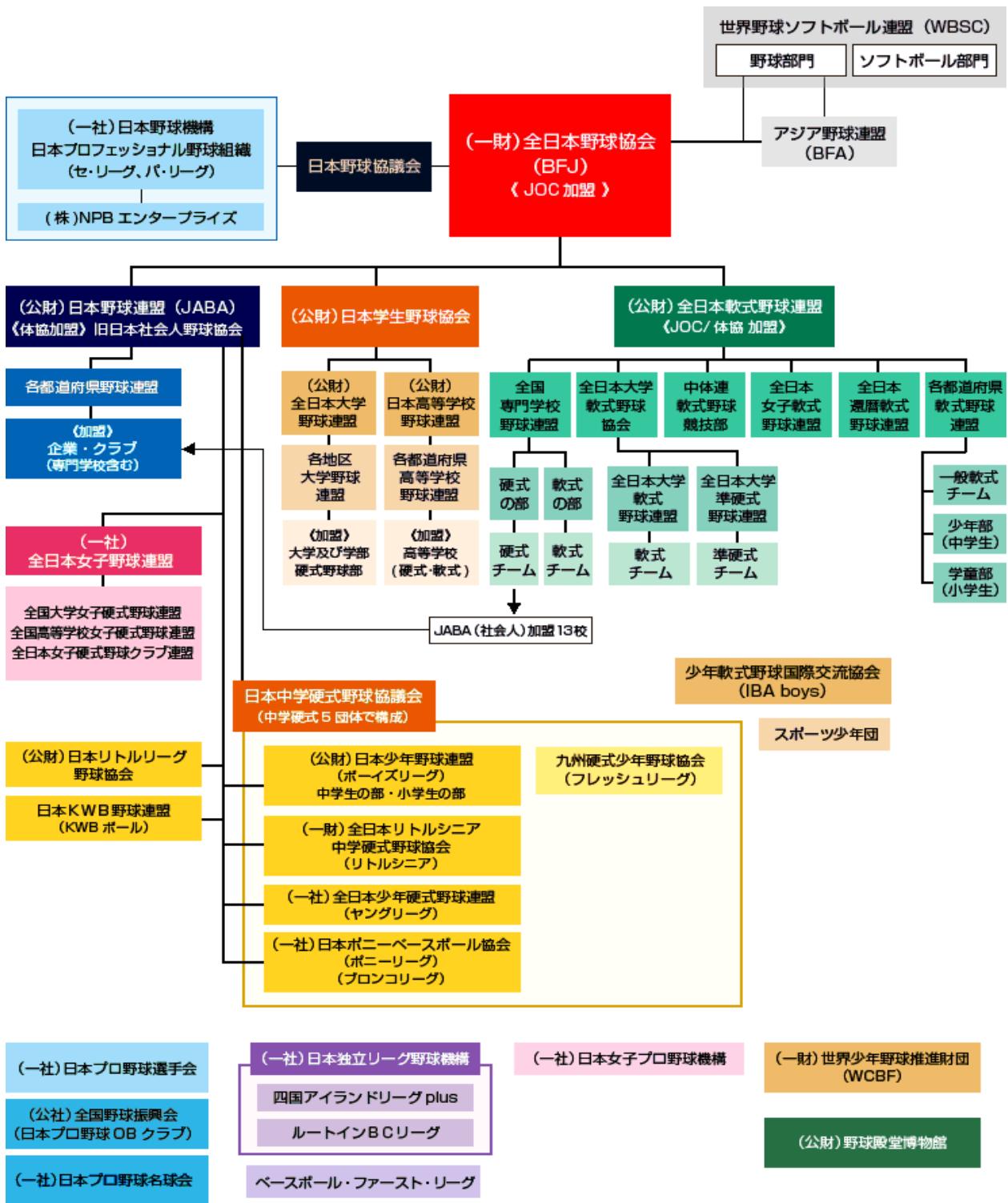
前日が雨で実技が体育館で行われたことと、実技の内容が予定より少なくなってしまったことから、
座学Ⅷ は行わず、朝から実技を行った。

6. 講義・実技

6-1 座学 I 都道府県連盟の役割

講師 馬場 光仁 氏 (滋賀県高等学校野球連盟 専務理事)

6-1-1 日本の野球団体関係図



6-1-2 日本学生野球憲章

昭和21年（1946年）に制定された学生野球基準要綱を、同25年（1950年）1月22日に日本学生野球憲章と改正。

現憲章は、平成22年（2010年）4月1日より施行された。

前文より抜粋（特に重要な部分）

国民が等しく教育を受ける権利を持つことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。

(中略)

学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立って行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的な意味をもつものとなる。学生野球は、地域的組織および全国規模の組織を結成して、このような交流の枠組みを作り上げてきた。

6－1－3 連盟の目的と事業

(一般財団法人) 滋賀県高等学校野球連盟 定款

(目的)

第3条 この法人は、日本学生野球憲章に基づき、滋賀県の高等学校野球の健全な発達に寄与することを目的とする。

(事業)

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 高等学校野球の普及、振興、指導及び監督
- (2) 高等学校野球大会その他の試合の開催及び協力
- (3) 高等学校野球に関する調査及び研究
- (4) 高等学校野球選手、部員等のスポーツ外傷予防及び健康増進
- (5) 高等学校野球に関する講習会・研究会の開催
- (6) 高等学校野球を通じた国際交流及び国際相互理解の推進
- (7) 高等学校野球に関する関係諸団体との協力及び提携
- (8) その他この法人の目的の達成に必要な事項

目的と事業については、学生野球協会、日本高等学校野球連盟、都道府県連盟の定款と違いはない。連盟・加盟校は常に憲章に基づき活動しなければならない。

6－1－4 連盟の事業と方向性

(1) 高等学校野球の普及、振興、指導及び監督・・・加盟60校（含軟式4校）、2500人の部員を中心に行っていく。大切なのは現場の声を元にしていくということ。

(2) 高等学校野球大会その他の試合の開催及び協力・・・春夏秋の3大会を中心とした運営

{(3) 高等学校野球に関する調査及び研究}

- (4) 高等学校野球選手、部員等のスポーツ外傷予防及び健康増進 ・・・ 役員・指導者・部員・審判
 (5) 高等学校野球に関する講習会・研究会の開催 員のレベルアップ
- {(6) 高等学校野球を通じた国際交流及び国際相互理解の推進
 (7) 高等学校野球に関する関係諸団体との協力及び提携 ・・・ 関係団体等との信頼関係の構築
 (8) その他この法人の目的の達成に必要な事項

以下の点を心に持ちながら、運営に当たっている。

- ① 広く見渡す目と現場を受け止める姿勢が必要。
- ② 大会運営は、選手が主役。「成功して当たり前」の心構えで。生徒にとっては人生で最後の大会。
- ③ 滋賀県にふさわしい方法でレベルアップを図る。
- ④ 今まで築いてきた関係機関との信頼関係をさらに発展させる。
- ⑤ 課題の複雑化、多様化に対応できる組織マネジメントが重要。

6－1－5 日々の業務と組織

(1) 業務

- ① 大会、各種行事の日程調整や準備 ・・・ 他団体との日程調整、各種団体との連絡調整
- ② 各種事務処理、会計業務 ・・・ 理事長を中心に事務局が担当
- ③ 外部との情報交換 ・・・ 行政、高体連、体育協会、中体連など
- ④ 日本高野連、近畿地区高野連との連絡、連携 ・・・ 指導、アドバイスを受ける
- ⑤ 不祥事の処理、苦情対応 ・・・ 処理や対応とともに、未防止に向けての指導、アドバイス
- ⑥ 加盟校への監督、指導、相互の情報交換 ・・・ 一定の距離感を保ちながら、平等に付き合う
- ⑦ 各種課題への取り組み ・・・ 年度ごとの主な課題を明確にし、具体的に取り組む

(2) 組織

滋賀県高野連の組織 ・・・ 会長以下、24人の理事が、審判部員80名（教員0）と協力して運営する

- ① 総務担当 ・・・ 各種データの管理、HPの運用、大会執務割り当ての作成、その他の庶務
- ② 強化担当 ・・・ 強化関係事業の立案・実施
- ③ 審判部担当 ・・・ 審判部との連携、審判講習会等への協力
- ④ 記録担当 ・・・ 大会記録の整理、連盟記録集の作成
- ⑤ 会計担当 ・・・ 経理、予算・決算の報告
- ⑥ 事務局 ・・・ 専務理事所属校に設置

一般財団法人化にともない、さらなる組織の強化と業務の効率化を図りたい。

6－1－6 運営上で注意していること

(1) 大会運営

- ①チーム・選手、応援団・観客、会場・周辺住民、マスコミ、行政など、それぞれの視点が必要
- ②役員、審判員が一致団結して運営に当たる
- ③どのチームにも平等に開かれた甲子園への扉
- ④高校野球ファンを魅了するレベルの高い試合

- ・全て平等のつもりでもわかつてもらえない時があるが、譲れないものもある。
 - ・一度起きた問題の再発防止に全力を注ぐ。
 - ・苦情があった時に十分に対応できないことがある。結局それが大きな問題になることが多い。
 - ・近畿では入場料を100円上げて、現在は700円。しかし、苦情はなかった。

(2) 強化

- ① チーム・部員の強化（一年生大会・主将研修・夢の向こうに・海外派遣など）
- ② 指導者の強化（各種研修会・甲子園研修など）
- ③ 組織の強化（連盟事務局・連盟役員・審判部）
- ④ 悲願の全国制覇、上位大会での県勢の活躍のための出場校への援助

(3) アドバイス

- ①上位大会への出場チームが実力を発揮できるために
- ②日頃の部活での疑問点や問題点について
- ③不祥事については、隠さず報告、事後指導の重要性。若手へのアドバイスは特に重要
- ④その他、指導者からの様々な質問や問い合わせに答える

6－1－7 これからの課題

- ①組織を育てる・・・次の100年に向けて、高校野球を支える組織。
- ②「滋賀県の野球を育てる」・・・「郷土の代表」として、甲子園で活躍するチームを支える
- ③部員を育てる・・・「教育の一環」を貫きつつ、時代の要請に応える
- ④地域の野球を育てる・・・少子化・野球離れに対して連盟としてできること
- ⑤指導者を育てる・・・「高校野球」を発展させる若き指導者への期待

現場の指導者、部員は主役。ただ、主役であればこそ、脇役や裏方さんの仕事に対する深い理解が必要。また、若いうちに裏方を経験することも、将来のためになるのではないだろうか。連盟の仕事を学び、それを現場で生かすのも一つではないだろうか。

6－1－8 座学Ⅰを受けて感じたこと

今回滋賀県高野連の取り組みや、連盟の業務内容を聞いて、知らなかつたことや、違う視点から見えるようになったことなど、様々なことを学び、考えることができた。そして、運営を支えてくださっている方々がいるお陰で、一つ一つのチームが活動できているという感謝の気持ちを改めて感じた。私自身もこうして高校野球の監督をさせて頂いているのは非常に感謝の気持ちを感じていることである。また、単独チームとして試合に出られていない現状で、連合チームとして活動ができること、また、今年度の夏の大会でいれば、本校の三年生磯山洋介が開会式の先導及び開幕試合の始球式でマウンドに上がらせていただいたことなど、ずっと支えていただいていることにも改めて感謝の気持ちを感じた。強く、そして礼儀や姿勢などもしっかりとチームを築き長野県の高校野球のレベルアップに貢献したいという思いを持っている一方、現状は何とか存続するということを考えながら活動をしていて、長野県高校野球に満足な貢献ができていないことが残念である。今後、どんな形でも長野県高校野球連盟に貢献できるように、改めて謙虚にして感謝の気持ちを忘れないように活動をしていきたいと思う。

6－2 座学Ⅱ アンチ・ドーピングについて

講師 諸越 由佳 氏 (JADA)

現在、地区予選、甲子園大会ではドーピング検査は実施されてはいないが、世界大会においてはドーピング検査が実施されている。国内だけではなく、世界に目を向け、国際大会で活躍する選手の育成も考

え、アンチ・ドーピングについて考えを深めて欲しいという願いによって、第7回甲子園塾から、この講義内容に加わった。

6-2-1 スポーツが抱える問題

- ①人種差別
- ②パワハラ
- ③ドーピング・・・スポーツの魅力や価値を損なわせる
- ④賭博・八百長
- ⑤暴力

6-2-2 歴史

① 1960年 ローマオリンピックで自転車競技の選手がドーピングが原因で協議中に死亡。それを受け IOC が医事委員会を設置。

② 1968年 ドーピング検査実施

③ 1999年 • 「ローザンヌ宣言」アンチ・ドーピング活動

• World-Anti-Doping-Agency（世界アンチドーピング機構）設立

※各国、各競技でアンチ・ドーピング活動を進めるのではなくするのではなく、第三者機関が共通の統一基準でアンチ・ドーピング活動をしていくということを目的に設立された。

④ 2001年 JAPAN-ANTI-Doping-Agency（日本アンチ・ドーピング機構）設立

※設立される前は、それぞれの競技でアンチ・ドーピング活動をしていたが、設立後は JADA が第三者機関となり、アンチ・ドーピング活動を行うようになった。

⑤ 2004年 World Anti Doping CODE

※全世界共通のルール、規約。スポーツの世界がフェアであるため、そして、クリーンスポーツに参加するアスリートの権利を守るもの。

⑥ 2005年 アンチ・ドーピングに関するガイドラインを文科省が策定。

⑦ 2009年 改定

⑧ 2015年 改定

※2013年に行われたアンチ・ドーピングの会議にて、現 IOC 会長トマス・バッハ氏が「アンチ・ドーピングというのは、私たちのスポーツの未来への投資である。その未来はアンチ・ドーピング活動の成功にかかっている。アンチ・ドーピングとは安全保障のようなものである。そこには予防と抑止の両

方が必要だ。」とスピーチをしている。予防とは具体的には教育活動、抑止とはドーピング検査を指している。

6-2-3 アンチ・ドーピングについて

(1) ドーピングと禁止されている理由

①ドーピングとは「競技力を向上するために、禁止物質・禁止方法を使用すること」である。

②ドーピング禁止されている理由とは？

- ・健康を害する
- ・フェアプレイ精神に反する
- ・スポーツの文化的価値 (Excellence, Friendship, Respect) を損なう

※スポーツの価値を繋ぎ合せるのが PLAY TRUE の精神

(2) ドーピング規則違反はどのくらい起きているのか

①日本・・・日本では年間約 500 件の検査を実施。ドーピング違反は毎年平均 10 件くらい。

②世界の野球・・・2014 年時点の検査件数 1294 件中 9 件は確定。31 件は違反の可能性あり。

(3) アスリートの 6 つの役割と責務

- ①ルールを理解し守る
- ②いつでも・どこでも検査に対応
- ③身体に取り入れるもの責任を持つ
- ④アスリートとしての自分の立場と責務を伝える
- ⑤過去の違反を正直に伝える
- ⑥アンチ・ドーピング検査に協力する

(4) アンチ・ドーピング規則違反

※世界アンチ・ドーピング規程ではアスリートの「厳格責任」「証明責任」が求められる

- ①採取した尿や血液に禁止物質が存在すること
- ②禁止物質・禁止方法の使用または使用を企てるもの
- ③ドーピング検査を拒否または避けること
- ④ドーピング・コントロールを妨害または妨害しようとしてすること
- ⑤居場所情報関連の義務を果たさないこと
- ⑥正当な理由なく禁止物質・禁止方法をもっていること
- ⑦禁止物質・禁止方法を不正に取引し、入手しようとしてすること
- ⑧アスリートに対して禁止物質・禁止方法を使用または使用を企てること
- ⑨アンチ・ドーピング規則違反を手伝い、促し、共謀し、関与すること
- ⑩アンチ・ドーピング規則違反に関与していた人とスポーツの場で関係を持つこと

(5) サポートスタッフの役割と責務（24条） 2015年

①ルールを理解して守る

※アンチ・ドーピングのルールは変わってきてるので常に最新のルールを知る

②ドーピング検査・ドーピング検査プログラムへの協力

③自身の影響力を認識。アンチ・ドーピングに対するアスリートの価値観、行動変化に良い影響を

※「ロールモデル」であることの認識する

④過去10年間、アンチ・ドーピング規則違反になったことの情報をNADO+NFに開示 等々

(6) 制裁措置

個人に対して

チームに対して

①成績の取り消し

①参加資格の停止

②資格停止

②チームへの制裁

※違反者が意図したかどうかは関係ない。風邪薬などでうっかりという事例もあり、リスクマネージメントが重要になる。

(7) 自分のリスクマネジメントを怠らない

□禁止薬物違反になる可能性がある物

①医薬品（風邪薬、目薬、花粉症の薬、喘息の薬、痛み止め、張り薬 等々）

②サプリメント

③漢方薬

※サプリメントや漢方薬は表示義務がないために注意。

(8) 座学Ⅱを受けて感じたこと

アンチ・ドーピングの講習を受けて改善しなければならなかったことは、指導者のドーピングに対する知識不足、意識の低さである。特に高校野球ではドーピング検査を行っていない分、ドーピングに対して、非常に遠いもののように感じているが、実際にドーピング検査が導入されるようになれば、今ままでは違反者が相当出てくるのではないかと考えられる。「WinnerとChampionは違う。ゴールテープを一番先に切ることのみに重点を置くのではなく、尊敬できる行動をとり、眞のChampionを目指す選手になる、育成することを忘れない。」という最後のまとめの言葉を聞き、指導者自身も当事者意識を持ち、ドーピングに対する認識を持ち、知識を高める必要があるし、それは最終的には私たちが指導する生徒のためになると感じた。

6-3 座学Ⅲ 指導者としての基本的な考え方

講師 平川 敦 氏（北海高校監督）

6-3-1 平川 敦 氏 及び 北海高校野球部紹介

(1) 平川 敦 氏

- ・1971年4月6日 北海道根室市生まれ46歳。教員として17年目、監督として19年目。
- ・12年間を釧路市で、3年間を厚岸町で暮らし、16歳で親元を離れ、札幌北海高校に進学。
北海高校→北海学園大学→百貨店勤務（3年間）→北海高校社会科教員・監督
- ・一番大切にしていること
覚悟を持ち決断・行動し、変化していくこと 、不易流行
- ・北海道出身以外の監督が北海道で活躍する中、北海道出身である自分自身が道産子魂で結果を残したかった。

(2) 北海高校野球部

- ・1885年 北海英語学校として創立
- ・1901年 北海高校野球部創部
- ・戦績
 - 夏の甲子園出場 37回 (2016年 準優勝) 21勝37敗
 - 春の選抜大会出場 12回 (1963年 準優勝) 12勝12敗
 - 国民体育大会出場 優勝2回 (1960年・1994年)

6-3-2 指導者として何を考えるか

(1) どんな人生を送りたいか

①どんな人生を送りたいか

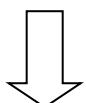
- ・楽しい人生→教員、野球部の指導

②どんな野球を目指すのか

- ・最初は負けない野球を追い求めた → 点数を取られない、そのために投手を鍛える
- ・その後、負けない=勝つ → 打てるチームが勝てるという考えに変わった

③どんな監督を目指すのか

- ・信頼される監督。どういう指導方針なのかをはっきりする。



①～③を実現するためにどうすればいいかを自身が考える

- ・自分は何をしたらよいか
- ・どうすれば成し遂げられるのか
- ・そして実行する

→ 自己動機づけがこれらの成功を成し遂げるものである。精神面（意志）肉体面（行動）、これが成功のカギ。意志と行動の一一致。

6－3－3 運を呼び込む

①目的を持った行動を続けているからこそ、運が向いてきたときにそれを利用することができる。目的を持ち努力し続ければ、過去の反省が有効に生きてくる。長く経験すれば教訓も多くなる。

②長く続ければ、一度か二度は必ずチャンスがやって来る。そのチャンスを絶対に逃さないということが大切。次のチャンスはいつ来るかわからない。チャンスを掴むために努力を続ける必要がある。

③作新学院の小針監督は強運の持ち主だと思う。2年目で甲子園に行き、そこから6年連続で甲子園に出場し、6年目で優勝を果たした。指導力があるのも勿論のことだが、相当な運を持ち合わせていると感じる。小針監督に、30前半の若さで6年連続で甲子園に出場し、そして優勝を果たした今、今後どんな目標を持ち、そしてどんなモチベーションで指導されるか聞いたところ、「7年連続を目指す」という答えが返ってきた。日本一になり、なおまた7年連続を目指すといったエネルギー、野球に対する強い思いを感じ、まだまだ自分自身も勉強し、努力し続けなければならないと感じた。

6－3－4 自分を信じる

①信じることは一つの心構えである。構えが重要である。

②心構えは知識と経験から生まれる。

③自分の考え方を変えたいと思えば変えることができる。

④プラス思考、積極的な態度が結果を変える。

⑤結果とは、能力×考え方 掛け算である。（考え方が+なら+、-なら-）

6－3－5 人の能力は心の用い方次第でいくらでも伸びる

①自らの潜在能力を引き出すために、引き出してくれる人と出会う。縁を大切にする。

②自分で引き出そうとする動機づけが必要である。

6－3－6 自分が変わらなければ何も始まらない

□変化するということは、成長するということである。

心が変われば、態度が変わる。

態度が変われば、行動が変わる。

行動が変われば、習慣が変わる。

習慣が変われば、人格が変わる。

6－3－7 高校野球に求められるものは何か（高校野球最大のテーマ）

日本学生野球憲章

国民が等しく教育を受ける権利を持つことは憲法が保障するところであり、学生野球は、この権利を実現すべき学校教育の一環として位置づけられる。この意味で、学生野球の経済的な対価を求める、心と心身を鍛える場である。

学生野球は、各校がそれぞれの教育理念に立って行う教育活動の一環として展開されることを基礎として、他校との試合や大会への参加等の交流を通じて、一層普遍的な教育的な意味をもつものとなる。学生野球は、地域的組織および全国規模の組織を結成して、このような交流の枠組みを作り上げてきた。

第1章 総則

第2条（学生野球の基本原理）

① 学生野球は教育の一環であり、平和で民主主義的な人類社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成を目的とする。

② 学生野球は、友情、連帯、そしてフェアプレーの精神を理念とする。

教育が大事なのか、勝つことが大事なのか。結論は両方が大切。教育をしなければ野球は勝つことができないし、勝つことが教育にもなると考えている。したがって、指導者は両方を追い求めなければならない。

6－3－8 野球の目的、そして勝つためにはどうしたらいいか

（1）野球の目的

①あなた私の、高校野球指導者としての目的・目標・夢は何か

	平川先生	私
目的	人格形成	世の中のため、感謝という心を広げる
目標	高校野球日本一、いい学生生活	公立校で甲子園に3回以上出場し、3回以上勝つ
夢	いい親父を作る	教え子と共に働き教育界に貢献していく

ルールブックより

- 1. 0 1 野球は、囲いのある競技場で、監督が指揮する9人のプレーヤーから成る二つのチームの間で、1人ないし、数人の審判員の権限のもとに、本規則に従って行われる競技である。
- 1. 0 2 各チームは相手チームよりも多くの得点を記録して、勝つことを目的とする。

ルールブックに書いてあるように、勝つことを目的としている限りは、教育と合わせて、勝つために全力で取り組む必要がある。

(2) 勝つためにはどうしたらよいか

いい選手を獲得し育成する。いい施設を作る。お金をかける。それだけで勝てるのだろうか？一見近道のように見えるが結論から言うと、それだけでは勝てない。真実として、一番大切なのは自らの成長。指導者は日々勉強し成長する。それが生徒の成長に繋がる。生徒の成長なくして勝利なし。組織（チーム）の力量は、リーダー（指導者）の力量以上にならない。また自分の潜在能力を引き出すために、人に出会うことが大事である。

6－3－9 選手との関わりで気を付けていること

- ①叱るばかりでなく讃める。
- ②監督が叱る。部長は監督の真意を伝える。
- ③注意・指導の一貫性。
- ④悪口を言わない。
- ⑤指導している態度・仕方・タイミングが大切。
- ⑥能力以上のことを、期待したり要求をしない。
- ⑦良いものを高く評価する。（ちゃんと見てくれている）
- ⑧好き勝手やらせない。放任と自主は違う。
- ⑨一人一人に常に関心を持っているということを伝える。
- ⑩厳しく叱って良い選手と、そうでない選手を見分ける。

6－3－10 最後に

- ①家族を大事に。

- ②縁を大切にする。
- ③いい加減が大切。
- ④敵をつくらない。ファンをつくる。
- ⑤信用しても信頼するな。気持ちに気持ちで応えるのが信頼。
- ⑥育てるよりも育っていくもの。
- ⑦自らの力量を上げる。組織の力量はリーダーの力量以上にならない。
- ⑧自分のスタイルを確立する。自分自身のオリジナルを作る。
- ⑨学校体育としての高校野球を第一に考えて指導するべきである。高校野球は完全なる学校。
- ⑩学校（野球）とは自分の力で生きている力（人）を育てる場。人生の答えは一つではないことを学ぶ。

6－3－1 1 平川先生の話を聞いて感じたこと

平川先生が一番重視されていることは、自らの成長と様々なことから学ぶという謙虚な姿勢であった。それは私自身も常日頃から、持ち続けようと心掛けていることだったので、自分のその姿勢や考え方には自信を持てた。また、「組織の力量はリーダーの力量以上にならない」という言葉は、私の中で非常に強く印象が残り、これからも様々なことから知識を増やし、そして感性を磨き、成長していきたいと思う。

6－4 座学III 指導者としての基本的な考え方

講師 大藤 敏行 氏（元中京大中京監督）

6－4－1 人間の成長なくして、技術の進歩なし！

「人間の成長なくして、技術の進歩なし！」という言葉を大切にしているが、それは生徒に向けて言っているよりも、自分自身への戒めとして心に持っている。

指導者として中京高校に戻ってきた当初は厳しい練習を長い時間すればチームは強くなるだろうと、考えていた。その時は、ある程度は結果出せたが、甲子園にはなかなか出場できなかった。6年目の夏の大会には自身のあるチームを作り上げて、愛知県のベスト4に残った。残った時点で強豪校と言われるライバルチームが負けていた上、勝ち上がり方も全てコールドという状況もあり、「やっと甲子園だ」という思いがあった。しかし、ベスト4の愛知産業大学三河高校との試合前に、自分のチームの生徒たちが大騒ぎしてふざけていた。それを見て、一抹の不安を感じていた。その不安が的中し、試合では負けてしまった。その試合をきっかけとして、「何を私はしてきたのだろうか。教員として生徒たちに何を伝えてきたか」ということを感じた。試合前に大騒ぎする、電車の乗り方のマナーの悪さから苦情がくる、女性の先生の授業では静かにしていられない、といった生徒指導上の問題が沢山あったにも関わらず、監督として、しっかりと注意し、指導してこなかった。そんな中で、結果を残していた坂口先生が率いる東邦高校の選手たちのグラウンドでの全力疾走などハツラツとした態度、ハキハキした受け答えなど、素晴らしい

姿勢を見て、「これは野球の技術の差ではない。これは監督力の差であり、人間力の差であり、指導力の差だ」「教員として何を指導したのだろう」と思った。

6－4－2 関東学園大学付属高校 梶田先生の一言

関東学園大学という群馬県にある大学で梶田先生という先輩が監督をしていた。その時に、控えの選手をとっていただいたのだが、発表があった日に失念をしていて、お礼の連絡を忘れてしまった。

次の日、朝一番で烈火の如くお叱りの電話があった。学校に事情を話し、すぐに大学へお詫びに行つた。グラウンドに行ったが「帰れ！バカヤロー」と言われただけで、口を聞いてもらえなかつた。

後日やっと話ができたのだが、その時に叱られただけでなく、「おい、お前さ無理してない？俺が知っている高校時代のお前は真面目で素直で何事にも一生懸命だった。俺はそこがお前の一番いいところだと思っていた。何か生徒の対して厳しくいなければいけないとか、恐くなればいけないとか思ってないか？素のお前でいいんだよ。何かお前のチームは借り物のような雰囲気がある」と言われた。それを聞いて、自分自身作り上げていた部分も見直し、もっと素の自分でチームを作っていくと見つめ直すきっかけとなつた。

6－4－3 広島商業 金光先生

広島商業での練習試合。前日は大雨で当日の早朝も雨が降っていた。中止と思っていた中、グラウンド長靴を履いて、生徒と一緒に泥だらけになりながら、水とりをしている先生がいた。午後からできると言われ、午前は部屋で休ませてもらい、いざ、午後にグラウンドに出てみると、広島商業のユニフォームをきてベンチにいたのは、生徒と水とりをしていた先生だった。その先生が金光先生だったのだ。監督自ら、相手のチームのために一生懸命水とりをしている姿から、「こういう監督さんに選手が指導を受けたら幸せだろうな」と思い、感銘を受けた。

6－4－4 嶋 基宏選手

入学前から、欲しい選手ではなかつた嶋選手。成績は非常に優秀だったが、技術は全く低くレギュラーではなかつた。しかし、誰よりも苦手ことから逃げず、黙々と練習する姿があつた。

二年生の夏の大会が終わつたあと、このままではベンチに入れないと思いまネージャーになりたいと希望してきた。その時に、夏休みまで頑張るように伝え、結論として、マネージャーと選手両方やると決めた。その中で普段から行つている努力と運も重なり、夏休み中にレギュラーになり、新チームのキャプテンになつた。その後、国学院大学に進学し、努力をし続けた結果プロ野球選手になつた。

その陰には、一日一日目標を持ち練習し続けたこと、誰でもできる挨拶、返事、掃除、気配りを誰にも負けないくらいやってやろうと実践してきたことが大きな力になつた。

6－4－5 留魂（グラウンドにある石碑の言葉）

みんなが苦難に耐えた
みんなが死線を越えた
みんなが栄光を握った
みんなが伝統を守った
そして今も
みんなが見守っている
応援している
願っている

みんなという言葉が5回出てくる。石碑には、プレーしている選手よりも圧倒的に多くの整備をしている選手の姿が彫られている。みんなのありがたさ、仲間のありがたさ、仲間に對して感謝の念を持たなければいけない、それを伝えてくれるものである。

6－4－6 大藤先生の話を聞いて感じたこと

人としてどう生きるか、どう在るかということが非常に大きな課題であると感じた。甲子園で勝ちたいからこそ、信じたことを貫いて失敗もするし、挫折もする。しかし、そんな中で大藤先生のように、自分が変わり、そして人としてよりいい道に向いていくことが、自分の目標達成のためには必要なだと感じた。人としてどう生きていくかということは、常に向き合っていくべきことだと思う。私自身も野球の指導者であるのと同時に、学校の教員であることをしっかりと忘れてはならないと思った。

6－5 座学IV 部員とのコミュニケーションの図り方

講師 山下 智茂 氏 大藤 敏行 氏 平川 敦 氏

6－5－1 普段から選手とコミュニケーションを取るうえで意識していること

(1)平川先生

- ①特に最高学年のレギュラー以外の生徒たちに意識的に声をかけるようにしている。練習中は全員に声をかけることは難しいので、一人ひとり進路などの面談をするようにしている。また、週一度程度行っている環境整備などの時間に、面談を行っている。
- ②入ったばかりの一年生には、最初の夏の大会が終わるまでは個人的にはあまり声をかけず、全体に話すことが多い。

(2)大藤先生

- ①昼休みは全員集めて、一緒に食事を行っている。その時に弁当の様子を見て、家庭を知るようしている。また、話す内容は野球以外のこと。
- ②野球ノートを活用する。
- ③どんな場面でもよく見て観察することが大切。何か異変があればどこかにサインがでるので、それを見つけたら面談を行うなどして、事前に手を打つ。

6－5－2 年齢を重ねるにつれてコミュニケーションの図り方で変化してきことはあるか

(1)平川先生

- ①年を重ねる毎に、練習は練習、学校は学校と会話を変えることができるようになった。最初は監督と選手という部分をはっきりしていた。監督は厳しくなければいけないと思っていた。
- ②年を重ねる毎に素を出せるようになった。

(2)大藤先生

- ①若い頃は自信がなく、弱味を見せたくなかった。
- ②年を重ねる毎に決めごとが減ってきた。ゆとりや余裕が出てきた。

(3)山下先生

- ①一番は生徒が何を考えているかをしっかりと観察し把握することが大切。
- ②生徒が先生を見ている目は鋭い。
- ③一人ひとり毎日10回以上声がけした。
- ④レギュラーは叱る、レギュラー外は誉める。
- ⑤昔は説得してきたが、今は納得しないと生徒は動かない。だから指導者は三倍も四倍も勉強しなければ子供はついてこない。
- ⑥若い頃に失敗を繰り返してきた。練習のボイコットも受けてきたが、意識的にそうなるようにしむける。そうするとチームが団結する。
- ⑦30代、40代になってくると、育てる野球になっていった。そうすると野球が楽しくなってくる。

6－5－3 若い頃にしてきたことや失敗してきことで具体的にどうか (受講生質問)

山下先生

- ①卒業の時に、部員に一人ひとり手紙を書いてきた。
- ②日大三校の小倉先生は、寒中見舞いを出していた。
- ③最高の職業は教員であり、監督であり、部長である、そう思えるようにいて欲しい。

6－5－4 キャプテンとの距離感や、リーダーの育成で心掛けていること (受講生質問)

(1) 平川先生

- ①男子マネージャーに全ての権限を与えている。マネージャーを有効的に伝える。マネージャーからキャプテンという仕組みを作っている。
- ②マネージャーがまとめあげる。
- ③キャプテンはレギュラーでゲーム中心。普段の練習はマネージャー中心。役割分担を行う。
- ④マネージャーから監督の意見や考えを伝える。

(2) 大藤先生

- ①キャプテンは指名しない。
- ②女子マネージャーが入ってきてから、甲子園にいけるようになった。それは、部員が人に対する気配りができるようになったからではないか。男しかいない部と雰囲気が変わった。
- ③キャプテンにリーダーシップを求めるというようなことはしていない。最終的に全体的にいい集団になればいい。

(3) 山下先生

- ①強いチームを作るポイントは2つ。1つはいい補欠を育てる。2つ目は、自分の片腕になるキャプテンとマネージャーを育てる。
- ②朝、一緒にキャプテンとマネージャーとご飯を食べながら、情報を集める。ご飯を食べながら話をすると、普段よりも話が弾む。
- ③日本一のキャプテン、日本一のマネージャーを育てる。気配りができるキャプテンやマネージャーであると、そのチームは強くなり、勝てる。

6－5－5 ノックをする時に心掛けていることは (受講生質問)

(1) 平川先生

- ①北海道の冬場はノックが難しく、シーズン中は限られて貴重な時間なので、基本的に技術形式のノックを行っている。
- ②対話をしながらの個人ノックということはあまり行わない。

(2) 大藤先生

- ①ノックは真剣勝負の場だと思っている。生徒は六時間目くらいになると体が動き出すと言っていた。一球目のノックをエラーすると、機嫌が悪くなると言われた。だから生徒は一球目は絶対にミスをしないようにしていたと後から聞いた。
- ②唯一燃え上がるるものであった。

(3) 山下先生

- ①毎日命をかけてやっていた。少しでもノックが悪くなると生徒がけがをする可能性がある。1センチでも2センチでもいいノックを打ちたい。そのために今でも体は鍛えている。
- ②甲子園で勝つために命をかけてやっていた。本気でやらないと甲子園には出場できないし、でも本気でやっても優勝はできなかった。

6-6 座学V 不祥事の取り扱いと防止について

講師 西岡 宏堂 氏（日本高等学校野球連盟副会長）

6-6-1 不祥事の取り扱い

- ①学校→都道府県高野連→日本高野連事務局→審議委員会→業務運営委員会→審査室
- ②指導=注意、厳重注意（改善報告書の提出） 处分=対外試合禁止・謹慎、登録抹消、除名
- ③週に一回必ず審議委員会を行っている。
- ④処分になると審査室という第三者機関が決定をする。審査室は、元文科省方、弁護士、大学教授など直接野球の指導に関わっている人たちで構成されている。
- ⑤各学校には伝えていないが、基準がある。報告書にはしっかりと5W1Hを入れて詳しく報告する必要がある。
- ⑥高野連からの指導に従わない場合は、高野連からの脱退を求める場合もある。過去にも脱退をしたケースがあった。

6-6-2 不祥事の特徴

(1) 生徒の場合

特徴として6月、9月、10月に不祥事件が多い。

- ①6月・・・2・3年生の1年生に対する暴力。指導係りが手を出すケースが多い。3年→2年→1年。
事前に防ぐために監督からの感謝や、声掛けが必要になる。
- ②9月・10月・・・同級生間の暴力が多い。大会が終わり、目標を失う。いじめが多くなる。指導者はどうやって春までの目標を持たせるか、それを考えさせていくことが防止の上で他大切。
- ③部員の非行で増えているのはSNSの問題。バイク・車の無免許は減っている。

(2) 指導者の場合

- ①9月が多い。
- ②指導者の場合は報告遅れも目立つ。報告は学校を守るため、部を守るため。
- ③体罰は許されないという認識がもう全体に浸透している。大きなケガは無くなった。しかし、体罰はいけないというのが浸透しているので、昔に比べて親が敏感になっており、すぐに訴えてくる。暴言も同じ。生徒本人から直接出てくることが減り、他の生徒や保護者からの訴えが多くなってきた。

6－6－3 不祥事件を防止するために

- ①日ごろから生徒の現状に注意する。
- ②生徒たちにしっかりと声をかける。自分の子供たちよりも生徒の方が過ごしている時間は長い。
- ③目標をしっかりと生徒たちに見せていく。
- ④ノックやキャッチボールは生徒との最高のコミュニケーションを図る上での最高の場。
- ⑤部長と監督とのホウレンソウをしっかりとしていく。部長と監督は父と母。教育の両輪。

6－6－4 講義Vを聞いて感じたこと

不祥事件の発生時期や原因を聞いてその理由を探っていくと、一つには生徒のモチベーションや目標に大きく関わっていること、また、もう一つは指導者がどうやって防いでいくかというところに気を遣っているかが大きなポイントになると感じた。

しっかりと生徒に目的と目標を考えさせ、意識させていき、モチベーションを維持していくために、まずは監督や部長がしっかりと頭を悩ませ、一生懸命野球に取り組んでいくことが結果的には不祥事防止につながるのではないかと思う。結局、生徒のことを考えず、手を抜いたり、放任していくと、生徒も自分たちの進むべき道を見失いがちになり、そこから不祥事に繋がってしまうのではないだろうか。

また、時代の変化という観点から見ると、世間的にも体罰は絶対に許されないという認識を多くの人が昔に比べて持っている。指導者は体罰という部分に関しては、いかなる場合でも絶対にあってはならないという意識を持ち、より気を遣っていかなければならぬと思う。

不祥事には必ずそれが起きる理由や原因があるはずなので、その兆候を見逃さないようにしていくことが大切である。

6－7 座学VI 部活動の役割と課題

6－7－1 部活動の役割と実態

(1) 一般の人々

- ①スポーツに対する人々の興味と関心の高まり
- ②高校野球においても観客動員数の増加
- ③有料でスポーツを観戦する時代

(2) 部活動の実態

- ①高校生の運動部加入率は 6.5% (滋賀県男子)
- ②多くの生徒が勉強との両立を目指している
- ③多くの学校で、部活動の役割を積極的に認めている
- ④保護者や地域の期待

(3) 高校野球

- ①加盟校 4,014 校 部員数 16,763 人 繼続率 90.1%
- ②他競技ではサッカーとほぼ同数

6－7－2 部活動を巡る最近の動向

- スポーツへの関心が高まる中で
- ①後を絶たない指導者の不祥事件、体罰など
- ②重大事故の発生
- ③部内での暴力やいじめなど

6－7－3 実際の現場

(1) 学校サイドから

- ①行政からの指導
- ②学校の方針
- ③部顧問会議・生徒総会
- ④申し合わせ事項

(2) 連盟サイドから

- ①日本学生野球憲章
- ②高校野球に関する規則、通達
- ③地方連盟のルール
- ④ルールブック・大会要項
- ⑤申し合わせ事項

※両サイドからの整合性を保ちながら野球部の基本方針が生まれ、運営される。片方の立場に偏りすぎるとバランスが取れず、摩擦が生じる。

6－7－4 部活動の運営の方向性

- ①基本方針の明確化
- ②指導体制を整える
- ③計画的な活動を行う ←はっきり計画がわからないと保護者は不安に思う。
- ④指導者の指導力の向上に努める
- ⑤部員の意欲、自主性、自立性を促す ←沢山言いたいことはあると思うが自分にSTOPをかける。

6－7－5 特に注意すべき点

(1) 野球部、野球部指導者の校内での位置付け

- ①最高責任者は学校長… 責任教師、監督以下は適任者と認めたものから選出される（日本学生野球憲章）
- ②教職員、一般生徒からの野球部の評価は？
- ③甲子園に出場したから、応援してくれるのはだれ？
→教職員、一般生徒からどう見られているか。勝ち負けだけにこだわっていると見えなくなってくる。遠くまで響くような活動が大切。そういうことをやっていれば、ちょっとくらいの失敗は挽回できる。

(2) 部員の指導

- ①部活動以下で存在感を高める努力
- ②「頼りになる野球部員指導」
→部員たちのプライドをくすぐってあげるような声掛けをし、自覚を持たせる。

(3) 保護者、OB会対応

- ①窓口に開き、情報は指導者から発信する
- ②先入観を捨て信頼関係を築く努力
→一番信頼できる情報は顧問の情報であるという信頼関係を築く。それができていると、何かあった時には保護者やOBに協力してもらえる。

6－7－5 リスクマネジメント

(1) 常に想定の範囲を広げておいて、それに備えておく

- ①部活動中の事故やけが
→特に指導者いない時に注意する。
- ②不祥事
- ③勉強との両立
- ④部費の管理
→防衛ラインを色々な視点から作る。部長や、管理職の先生方に協力をしてもらう。

(2) 部員、保護者にも周知徹底する

①発生時の対応を部員に指導する

→指導者不在の場合もあり得るので部員と共に事故防止をする。

ミーティングなどで「ヒヤリハット」の点検。

発生時に保護者へ連絡、検査結果の確認、引き渡し、その後の連絡を徹底する。

②保護者に理解を深めてもらう

→日頃の指導はどうしているか伝える。情報経路を一本化する。指導に差があると思われると指導ができなくなる。

③部員と保護者の思いを大切に

→勉強できる時間の確保。勉強している時間の把握。

④説明責任を果たす

→複数で管理し予算と決算の報告を必ず行う。個別の報告も忘れずに行う。

(3) 一番身近な人に信頼される組織作りを

□遠くばかりを見ていませんか？しっかりと足元を見てていますか？

→・部内では監督なら責任教師の先生を、責任教師なら監督の先生を、責任教師、監督はコーチの先生を大切にする。

・校内では同僚の先生を大切にする。

・他競技の顧問の先生から学ぶ。

・同志的な付き合い、同僚性の向上。

6－7－6 最後に

①指導者は部活動から法令遵守に基づいた経営感覚を学ぶ

②監督は、人の美を掩はず（賢明な君主は部下の美点を覆わないという意味）

③部員は、部活動から、社会の一端を実体験する

④指導者も、部員も、部活動で学んだことを社会に還元する

⑤「文化としての高校野球」を担い手は我々という誇り

6－8 座学VII 日本の球史

6-8-1 ベースボールの誕生

(1) 誕生

- ① 1845年アレキサンダー・カートライトがベースボールの原案を考案。
- ② 墓間を42ペイス(90フィート)とする。
- ③ プレーヤーの数を1チーム9人とし、ポジションを明確にする。
- ④ ファウルラインを設け、それより外に出た打球はファウルボールとする。
- ⑤ アウト3つで、攻守交代とする。
- ⑥ 走者に球を投げてアウトにする代わりに、塁に球を送って殺す刺殺を設ける。

(2) ベースボールが生まれた当時の精神

- ① 民主主義を基にしたルール。
- ② 9人全員に打順が回ってくることも、民主主義の平等の精神から。
- ③ 野球は人がホームに戻ってきて点数になる。人を磨くという点から成っている。また、最後は船に乗って家に戻ってくるという船乗りの発想が組み込まれているのでは。
- ④ ファウルラインは「もっと近くで見たい」という要望から生まれた。
→親睦のスポーツという観点から始まっているので見るスポーツへ。
- ⑤ 審判員は一人で、観客が陪審員であった。当時は勝ち負けよりもケガ無く終わることを見届けるため。審判も観客にジャッジを聞くこともあった。

(3) 野球の七不思議

- ① 守備側のチームがボールを支配している →イギリスのクリケットが元と言われている。
- ② タイムゲームではない →最後の一球を投げる必要性
- ③ 投手のマウンド →最初は無かった。雨が降ると水たまりができてしまうので雨対策として作られた。
- ④ ホームベースの形 →元々は円盤型でひし形に変わり、1900年に5角形になった。
→ユニフォームの原型は軍服。休戦日は親睦で野球。識別用に帽子をかぶった。
- ⑤ 防止の着用 →トラックと同じ方向に走る。理由は体の構造か?
→ケガ防止のため。
- ⑥ 最初に一塁へ走る理由 →元々の意味は牛の囲い場。囲われている所で準備。
- ⑦ ストッキングのデザイン
- ⑧ ブル・ペンの由来

6-8-2 草創期のルールの変遷

1845年 空振り3回で打者アウト
1858年 3つ目を見逃した場合もカウントすることに
Good ball strike you out!
1863年 ボールカウント始まる
1876年 9ボールで1塁へ
1884年 投球は上手投げとなる
1887年 5ボール、この年だけ4ストライク
1889年 3ストライクと4ボールで四球が定着
1893年 投手板とホームプレートの距離が18.44m
1900年 ホームベースが5角形となる

6-8-3 フェア・プレイの提唱者

(1) フレデリック・ウィリアム・ストレンジ

- ①英国ボイジャー州の出身
- ②経歴

明治 8年 20歳で大学予備門の前進東京英語学校の教師として来日。

明治 9年 外国人同士の野球試合にH・ウィルソンたちとプレー、レフトを守っている。

明治16年 ストレングは学校スポーツの必要性を説き、ストレンジの指導により、日本で初めて本格的な陸上運動会が神田錦町で開かれた。

(2) フェアなスポーツマンシップの精神提唱

- ①競技においてもっとも尊いのは、最善を尽くすことで、心残りがないようにすることだ。勝敗などは第2の問題である。

- ②スポーツの奥義は情念を鍛錬することであって、筋肉を鍛錬するものだけのものと思ってはならない。

(3) ストレング先生の教え（佐山和夫氏の解説）

- ①定刻を厳守せよ。
- ②奮闘努力せよ。負けても負け惜しみを言うな。
- ③競技は公明正大にやれ。卑怯なことをするな。
- ④審判に服従せよ。人は神に非ず。ときに判定に誤ることもあるが、異議を唱えず、冷静を保て。
- ⑤プレーを楽しめ。自分より優れた相手を敵視するのではなく、師とせよ。
- ⑥賞品は記念品のみとせよ。
- ⑦僕約はスポーツマン第一の信条。他人に憐れみを乞うてまでして贅沢をするものではない。
- ⑧練習は学業に服せよ。そして練習場に立ったときには、さっさと練習をして、終わったら速やかに去れ。長く残っても気迫が弛緩するだけだ。克己、節制、制欲、忍耐、勇敢、沈着、敏活にして機知縦横、明快にして氣宇壮大これらの氣質特性こそ、天がスポーツマンに与える最高の商品ではないか。

6－8－4 高校野球の歴史

(1) 全国中等学校優勝野球大会 創設

大正4年8月18日、朝日新聞社が、野球を通じて健全な青少を育成するという目的で大会を創設。

(2) 第1回大会

①大阪府・豊中グラウンドで開催、全国予選参加校は73校。

②全国大会出場校（10校）

秋田中、早稲田実、山田中（三重）、京都二中、和歌山中、神戸二中、鳥取中、広島中、高松中、久留米商

③第1試合は、鳥取中 14-7 広島中

④決勝は、京都二中 2-1 秋田中

(3) 第3回大会から鳴尾球場

①大正6年の第3回大会から阪神電鉄が、鳴尾競馬場のトラック内に2面の野球場をつくり、大会を誘致。5、6千人の観客を収容できた。

②予選参加校数 118校

③初めて入場式が行われた。

④決勝は、愛知一中 1-0 關西学院

(4) 甲子園大運動場完成

①大正12年、第9回大会準決勝、甲陽中と立命館中の試合で、超満員の観客がグラウンドに流れ込み、試合続行不可能になる。このことが甲子園球場建設の契機となる。

②阪神電鉄の三崎省三専務が、大野球場建設を提唱、武庫川の廃川となった地域3万坪を買収、第10回大会に間に合わせるよう突貫工事が行われた。

(5) 第10回大会

①大正13年（1924年） 予選参加校数 263校

②出場校数 19校

③阪神甲子園球場の初戦 北海中 5-4 静岡中

④決勝 広島商 3-0 松本商

⑤大会3日目の土曜日に早くも収容6万人と言われたマンモススタンドも満員札止めとなる。

6-9 座学Ⅷ 今後野球人口を増やすために

講師 山下 智茂 氏 大藤 敏行 氏 平川 敦 氏

□2日目に雨が降り、タイムスケジュールが変更になった都合上、特別座学として、討議形式で現在の野球界の現状と課題、野球人口を増やすために高校野球が取り組めることなどを話合った。

（1）野球をするのにお金がかかるので、そのコストを下げれないのか？

①お金がかかることが野球をやらせない理由にもなっている。

②野球人口が減ってきてている中で、コストを下げるることは難しい。

③安い物を大量生産できないのか。

④お金がかかることが海外での普及の妨げになっている。

（2）中体連では女子の人数が伸びている。男子は減少。

①女性を競技者としても増やしていくには、その子供が野球をやるといった流れができるのではないかと思うか。

②女性に野球場に足を運んでもらう工夫をしていく。

（3）野球をやる場所がない

①公園でキャッチボールくらいはできるが野球の試合はできない。

②フットサル場が増えている。野球もキャッチボール等が気軽にできる場所をもっと増やすべき。

③幼児教育の段階でサッカーをやらせるという流れがある。

（4）関わり合い

- ①野球は親同士のつながりが面倒だと思われがち。
- ②小学校などの指導者への教育をしていかないといけない。指導には段階がある。
- ③秋田県のように小学生への高校生への野球教室を行う。
- ④魅力を伝えるのは指導者の指導力も大きく関わってきている。
- ⑤地域のチームが頑張ると、地域に残ってやろうと思うようになる。
- ⑥小学生や中学生に高校のグラウンドを提供し関わる。
- ⑦ユニフォームを着て地域のボランティアをする。
- ⑧現在の小学生は親の関わりによって競技を選ぶ。親次第という所が大きい。
- ⑨親の関わりが少ない社会体育のチームでは野球をしている子供の数は少なくない。

7. 班別討議

7-1 班別討議 新入部員の指導について

7-1-1 A班で出た意見

- ①入部前に指導方針と練習方法（内容・時間等）について資料を用いて説明している。
- ②学校生活が第一であることを徹底して指導する。
- ③人の気持ちを考えれる人間になるように言い聞かせている。
- ④学業をしっかりとし、マナーをしっかりと身に着けて、初めて野球部員であると指導している。
- ⑤高野連と高体連の違いについて説明している。
- ⑥選手・保護者・指導者の三位一体。
- ⑦学校の事情から、野球部の中に「競技型コース」と「生涯スポーツ型コース」を用意し、一生懸命やりたい子と、それなりにやりたい子に分けている。人数費は9：1くらい。最初にその説明をして承諾書にサインももらっている。
- ⑧同じポジションの2年生とバディーを組ませて、相談しやすい環境を用意し、練習については、最初は一年生だけで実施している。
- ⑨自身の行動に責任が生じるということをよく伝える。
- ⑩学業>野球ということをしっかりと伝える。
- ⑪筋力トレーニングなど効果が分かり易いものに最初は取り組ませる。
- ⑫真剣勝負の面白さを伝える。
- ⑬教育係を2人つける。

7-1-2 それぞれの班で出た班別討議の意見

(1) A班

- ①真正面から取り組めば必ず生徒には通じるので諦めさせない。
- ②上下関係をはっきりさせる。その中で絆を作り上げる。
- ③先に先に説明することによって、問題が起きる前に防いでいく。
- ④人数が少ないということはその分、接する機会が増えるということだからそれをプラスに捉え生かしていく。

(2) B班

- ①目標はどこか？ターゲットはどこかということをはっきりと明確させる。
- ②野球以外に目標があることも大切。
- ③存在意義を伝える。
- ④ケガをさせない。
- ⑤上下関係は大切だが、絶対に暴力をさせない。

(3) C班

- ①人数が多い少ないに関係なく、チーム方針や目標をしっかりと伝え、意思統一ができるように。
- ②学校に慣れることも大切。
- ③決まりを守ることが条件だということをしっかりと入部時は教える。
- ④中学から野球を継続したいという子を大事にする。また、初心者も大事にする。
- ⑤練習をさせながら、話を徐々にしていく。
- ⑥野球部が居心地のいいものになるようにしていく。
- ⑦役割を与える。

(4) 平川先生

- ①3年間で特に大事な時期は1年春と3年夏。この時期はやっぱり野球をさせるべきである。自分にとっても我慢すべき時期である。
- ②余計なことを考える暇を与えて、練習をしていく。
- ③野球部が居心地のいいものになるようにする。それには役割や仕事が大切。

(5) 大藤先生

- ①一年生は特に体ができあがっていないので、ケガが怖い。休日もしっかりととてやる必要がある。
- ②基礎体力の練習だけではやる気がなくなってくる。
- ③ルールを守ること、仲間を大切にすることは教員が必ず伝えるべきこと。

(6) 山下先生

- ①上級生には未熟な下級生を認識させる。
- ②下級生には自分が未熟だと認識させる。
- ③中学で硬式野球経験者はプライドが高い。
- ④1年生は礼儀、2年生は努力、3年生は感謝。
- ⑤いい部長と共に生徒指導を行う。監督が叱ったら、部長はフォローする。
- ⑥やめたいと言ってきた部員がいたら、3日以内に解決しないと厳しい。
- ⑦何事を行うにも3ヵ月→3年→30年という我慢の法則。
- ⑧名門は3年生を優先する。
- ⑨見る目を養う。
- ⑩プライドが高い者はレベルの高い練習で花を折る。
- ⑪叱ったら同じことの繰り返し。誉めてから叱る。
- ⑫練習中に目を盗んでずるいことをする者を見逃さず叱る。しかし、そういう選手をいざという時に起用すると活躍する。だから、常にそういう者を探しておく。
- ⑬球場に応援に来てもらえるチームを作る。野球部もバレーボールやサッカーの応援に行っていた。

7-1-3 班別討議を終えて感じたこと

各都道府県の指導者たちが新入部員に対してどういうことを心がけて指導をしているか、どんな具体的にことを行っているか知ることができ、とても参考になった。また、話を聞いていると、私自身が今まで行ってきたことや、考えてきたことも多くの先生方も同じ考え方を持っているということがわかり、人を育てる上で根本的な基盤となる部分は同じだと改めて感じた。

講師の先生方からはテーマだけでなく、幅広く経験談や実践してきたことを聞くことができ非常に参考になった。特に山下先生は色々なを考え、実践してきたことがわかり、それが失敗したとしても、最終的には成功への糧になったことがわかり、何よりも考えることと行動すること、そして生徒のためにという思いを持つということが大事だということを強く感じた。

7-2 班別討議 体罰についてどう考えるか

7－2－1 A班で出た意見

- ①恐怖心与えて服従させることは簡単であるが、それでは意味がない。
- ②指導者にも我慢強さが必要。
- ③アンガーマネジメントをする。
- ④体罰をしないというのは自分との約束。約束を守れない者が生徒指導する資格はない。
- ⑤頭に血がのぼった時に、どうそれを逸らすか。
- ⑥自分が体罰ではないと思っても周りから見たら体罰であることを忘れてはならない。
- ⑦いいことを誉める、ダメなことをダメと言う。
- ⑧生徒との心理戦。
- ⑨言っても聞かない、直らない生徒がいた時に、どうしたらいいのか悩んでしまう。
- ⑩体罰は自分の引き出しの少なさや、指導力の無さを露呈している。
- ⑪言葉で選手に伝える方法を増やす。
- ⑫叱る時も生徒の良いところを一つ伝えてから、改善すべき点を伝える。

7－2－2 それぞれの班で出た班別討議の意見

(1) A班

- ①生徒ができないことを恥ずかしいと思うあまり、叱ってしまうが、それは自分主体であって、生徒主体で考えていない。
- ②まずは自分の感情を理解する。

(2) B班

- ①体罰は絶対にしてはいけないが、だからといって言うべきことを言わないのは間違い。
- ②叱ることを恐れない。
- ③体罰は感情的な暴力。
- ④教育的指導ではない。
- ⑤自分自身の未熟さを知る。
- ⑥必ず誉めるようにする。

(3) C班

- ①体罰をすることは指導力が無いことと余裕が無いことを示している。
- ②結果にこだわり過ぎる時こそ、余裕が無くなり、上手くいかないと感じることが多くなる。
- ③暴力は指導者の逃げ。指導方法の勉強をし、引き出しを増やす。
- ④体罰は生徒の心に傷を残す行為。
- ⑤野球で納得させる。

(4) 平川先生

- ①挨拶ができない、全力疾走をしないといった選手が手を抜いたということに、恥ずかしいと思う。その感情が怒りとなって現れる。
- ②殴ってしまったら負け。
- ③言うことは言って、怒りの感情を発散する。絶対に溜めない。
- ④どうしても手が出そうになるときは、目の前から消す。そして心を落ち着かせる。
- ⑤どう伝えるかという方法が大切。
- ⑥選手が言い訳できない、正論でしっかりと指導する。

(5) 大藤先生

- ①暴力は生徒に心に傷を残す。
- ②保護者からしても、指導者からしてもかけがえのない子供。
- ③怒りがある時は笑う。笑の時は怒る。

(6) 馬場先生

- ①生徒は自分が持っていない感性を持っている。どんなことを感じているか、思っているか、指導者は知ろうとする努力が必要である。
- ②叱る時には、自分が言ったというより、言わされている時もある。
- ③叱る時のワンクッションの重要性。
- ④生徒は生徒でそれなりのストーリーを描いている。指導者にとって考えてストーリーと違うものであるとびっくりする。

(7) 山下先生

- ①指導者が変わらなければいけないという意識が大切。
- ②自分自身を変えるために、顔の研究をする。鏡の前笑う練習をする。
- ③生徒を信じ、許す心の余裕。
- ④指導者は時代に合わせ、プライドや執着を捨て、柔軟性を持つべき。
- ⑤人間的魅力を磨く。
- ⑥尾藤公氏の言葉

グラウンドは畑である。開拓使、整地し、種をまき、水をやり、農作物を育てる気持ちが大切である。不作だと物言わぬ農作物にあたるのか。それは明らかに自分の世話を足である。

7－2－3 班別討議を終えて感じたこと

体罰がいけないということは広く浸透している世の中において、より指導力が求められるようになっている。しかし、思えば、昔も今も体罰がベストの方法だったわけではない。昔が寛容だっただけで、結局体罰という方法がベストであったわけではなかったと思う。生徒を力強くで言うことを聞かせることは、ある意味、楽である。しかし、その樂の先に生徒に残るのは心の傷、嫌な思い出であると思う。今も昔も指導者には、様々な指導法が求められているし、それを勉強する気持ちがなければならない。

8. 実技

元星稜高校野球部監督 山下 智茂 氏
元中京大中京野球部監督 大藤 敏行 氏
北海高校監督 平川 敦 氏

□二日目が雨だったため、残念ながら体育館での実技となってしまい、やれることが限られてしまった。体育館の中でできる限りのことを行い、基本的な技術指導を行った。

8－1 ミーティング

- ①体力の重要性。勉強と野球の両立。勉強をするにも体力が必要。体力をつけるには野球が最適。
- ②どこの筋肉を使っているかという意識を持つ。
- ③目的、目標を持つ。
- ④言われたことだけやっていても上手にはならない。工夫が必要。
- ⑤甲子園で勝つにはスピーディーな動きがなければいけない。0.1秒を大事しないチームは甲子園で勝てない。0.1秒で70cm進む。
- ⑥ミーティングで前にいる選手を使う。後ろの選手は使わない。目立つことが大切。



8－2 キャッチボール

(1) 山下先生

- ①キャッチボールが上手くならないと野球は勝てない。
 - ②肩慣らしでやるキャッチボールでは上手くならない。
 - ③甲子園を見てて、一番いいキャッチボールをするのは大阪桐蔭。グローブの音が遠くまで聞こえる。
 - ④お互いに会話をしながら。
- ⑤キャッチボールが上手くいけば人生が上手くいく。
- ・相手の捕りやすいところに投げてやる思いやり。思いやりが無ければ成功しない。相手のミスをミスに見せないのも思いやり。
 - ・声をかける。
 - ・暴投を投げたら、「ごめん」と謝るマナー。マナーが無いチームは応援されない。
 - ・サッカーのルールは17しかないが、野球のルールは2000以上ある。ルールがしっかりととしているスポーツ。暴投があれば走って捕りにいく。
 - ・危険認識。
- ⑥キャッボールは 速く、強く、正確に。
- ⑦自分の同じレベルの人とキャッチボールをすると上手になる。
- ⑧ボールを受けたら、すぐにトップを作る。
- ⑨ステップの位置が重要。つま先を開かない。キャッチボールで開いているものはバッティングでも開く。キャッチボールが悪いとバッティングも悪くなる。

(2) 大藤先生

- ①キャッチボールは足を動かして捕る。
- ②足で投げる。
- ③飛んでくるボールを線でとらえて、面で捕る。
- ④軸を作るために捕ってから胸に持ってくる。
- ⑤野球はボールを持っている方に主導権がある。投げる側に思いやりが必要。
- ⑥グローブにふたをする感覚を身に着けて、速く投げれるようになる。
- ⑦いい音をさせて捕る。それも思いやり。

(3) 平川先生

- ①自分が投げたいところに投げるのがキャッチボール。
- ②試合に出るためにキャッチボールをしっかりとできるようになることを求める。バッティングは3割。しかし、守備は10割を目指せる。
- ③指先の感覚をしっかりと磨く。

8-3 バッティング

(1) 山下先生

- ①自分に合うバットの持ち方やスタンスからしっかりと考へる。例えばグリップの持ち方。
- ・パームグリップ (長打)
 - ・フィンガーグリップ (单打)

②トスバッティングの基本

- ・まずは打つ方も、投げる方も気を抜かない。構えが重要。
- ・距離は5～7m。
- ・目を離さない。
- ・ワンバウンド or ノーバウンドで返す。
- ・トップからヘッドを下げない。
- ・松井秀樹氏はスランプの時に、トスバッティングとランニングをしていました。
- ・バントをする位置が、ボールを捉えるポイント。

(2) 大藤先生

- ①踏み出した足の親指と腕の位置をトップまたは間という。

②トップの作り方は三種類

- ・前足を上げて、手と頭の位置を残して踏み込む。
- ・構えた足をいったん引いて、踏み込む。
- ・足を引いておいて、前足のみを踏み込む。目がぶれない。

- ③いいバッターほどタイミングとるのが早い。

- ④早く間を取って、ゆっくりと対応する。

- ⑤軸足の膝とテイクバックを取る手の肘は同時動く。柔らかく。

- ⑥ピッチャーに対して胸を見せない。胸を見せたらバットのヘッドが出てきてしまいドアスイングになる

- ⑦踏み込んだ足の母指球と股関節を軸にして壁を作る。捉えるまでは絶対に開かない。

- ⑧踏み込み足の母指球が最後の砦。これが開かなければ、壁が崩れず低めや変化球を打つことができる。

- ⑨インパクトの瞬間に踏み込み足の膝と踵が静態する。

⑩バントの基本

- ・バントの位置とバッティングの位置は一緒。
- ・目とバットの距離が重要。ボールは逃げるがストライクゾーンは逃げない。
- ・自分から近づかない。
- ・のぞきこまない。
- ・ポイントはへその前。
- ・グリップは立てる。

8-4 ピッ칭



(1) 平川先生

①投手の最低条件

- ・18. 44m届く。
- ・ストライクがとれる。150km/h投げれても、ストライクがとれなければ意味がない。
- ・出力。下半身の力をどれだけ繋げれるか。

②ボールを投げる準備

- ・しっかりと体重をのせた低い重心で立つ。
- ・足を上げた時に、軸足は指で地面を掴む。
- ・足を上げた後に、少し軸足を曲げて体重をかける。曲げすぎると力が逃げてしまうので注意。
- ・腹筋に力を入れることによって、体に安定感が出てくる。力が逃げない。

③溜めた力を前に爆発させる

- ・練習法として、足を上げてしっかりと溜めたパワーを前に送るために、踏込みと同時に軸足で前に高くジャンプをして力を伝える練習をする。
- ・体が早く開かないように、グローブのある方の手で、肩の開きを抑える。
- ・ジャンプをしても頭は軸足の上に残す感覚を持つ。前に突っ込むのを防ぐ。前に突っ込まないようにし、利き手側にスペースを作る。
- ・リリースまでの腕が振られる距離が長ければ長いほど、加速距離が伸び、ボールの球威が増す。前に突っ込んでしまうと、腕が上がってしまい、加速距離が減ってしまう。
- ・ラインを地面にひいておき、踏込足が開かない、またはインステップにならないように意識をする。
- ・踏み込む足は、踵から着地しない。踵から着地すると、つま先に体重が流れる時に、横にぶれやすくなるため。踏込足の着地は足全体（膝が割れないように内側部分を意識）。



④変化球の投げ方

- ・深く握りすぎると、スライダーは投げにくくなってしまう。スライダーは指先を使う。
- ・ボールの下半分を指で切るような感覚。
- ・カーブやスライダーで重要なのは中指でなく、人差し指という感覚を掴む。
- ・手首を曲げたり、伸ばしたりすれば、スピードが変わる。
- ・キャッチャーの声のかけ方が重要。「曲がっていない」ではなく、「ちょっと動いている」

(2) 山下先生

- ①ピッチャーは1分に7球の投球練習。練習が効率的になる。また、甲子園でテンポを早くと急かされるので、それに対応できるように普段からテンポを早くする癖をつける。
- ②ピンチの時には時間をかける。また、早いテンポの中にもリズムを変える投球術を身に付ける。
- ③グローブは黒がいい。

8-5 走塁

(1) 大藤先生

- ①走塁は3S。
- ・S t a r t
- ・S p e e d
- ・S l i d i n g
- ②約束事は、チームによるもの。大切なのは全員が徹底すること。
- ③一塁ベースの離塁は4m～4.5m
- ④2塁走者は、バットに当たった瞬間に空中になるように合わせる。
- ⑤リードの位置
 - ・0アウト オンライン
 - ・1アウト 2歩後ろ
 - ・2アウト 4歩後ろ
 - ・ただしバントのケースの0アウト、1アウトはオンライン。
- ⑥二塁走者は自分よりも右ならバック、左ならゴー
- ⑦サードコーチャーはランナーに対してサインで伝えて、声だけで伝えない。
- ⑧スライディングは近くで滑る。

(2) 山下先生

①盗塁がセーフになりやすいカウントがある。一番は初球、二番目は3球目、三番目は平行カウント。

失敗率は1ストライクの後の2球目が高い。

②変化球のタイミングを狙う。

③足が遅い者はフォームでいくらでも速くなる。

④下り坂を走るトレーニングをすると足が速くなる。

(3) 平川先生

①走塁は技術練習。技術を磨けばタイムは縮まる。30cmでクラスプレーがクロスプレーじゃなくなる。

②ランナーに出た時に3つ頭に入れる。

- ・アウトカウント
- ・イニング
- ・得点差

③全力疾走は絶対に譲ってはいけない。

④ベースの腹を踏み、加速の道具にする。



8-6 ノックの実践

元星稜高校野球部監督 山下 智茂

(1) ノックを打つ心構え

①守りは監督の責任、打撃は選手の責任。

②監督はグラウンドで座っていてはいけない。立ち続けよ。

③1cmでも1mmでも狙った所へいいノックを打つために毎日ノックを打ち続ける。

④いいノックを打つために、毎日体を鍛え、体力を維持する。

⑤自分の好きなものをやめる。

⑥体を開かない。そのために、引き手持ちでノックを打つ。

⑦いいボール渡しを作る。

⑧第一試合の時は緩いボールを打って、選手を動かす。

⑨第二、第三試合はグラウンド状況に気をつけてノックを打つ。必ず観察する。

⑩選手には常に太陽を見て話す。

⑪相手が弱い時は厳しいノックを打つ。相手が強い時は優しいノックを打つ。

⑫厳しくする時は頭や心は冷静にする。

(2) 山下先生の実践ノック

①ノック

- ・一回一回指摘する。
- ・失敗したプレーはできるまで行う。
- ・声の重要性。「指示の声」、「予測の声」、「励ましの声」
- ・全員に伝えたいことは、集合を必ずして話をする。
- ・ノックを試合に近づける。
- ・バットの動きを良く見させて動かす。
- ・一本に対しての本気さを伝える。
- ・体を張ってでもチームのためにボールを止める。
- ・時には面白いことを言って、和ませる。

②イメージノック

- ・バットのグリップの位置を見て打球を判断し、自分たちで想像して、打球を処理し一塁へ送球する。
- 全員がその動きに対して動く。ボールを最後まで見る。

③瞑想ノック

- ・声を出さずにノックをうける。
- ・声がない野球はつまらないことを知る。
- ・3つの声を大切にする。



④喧嘩ノック

- ・野手と1対1でノックをする。
- ・昔は一人に対して1000球打っていた。
- ・ノックを受けている野手以外は全員が、周りを囲み声をかける。最後にやりきった時に全員で集まり、甲子園で優勝したかのように喜び、一体感を高める。
- ・夏の大会前、6月頃にこのようなノックをしてチームの団結力を高める。
- ・ノックを打っている最中もノッカーは甲子園を意識させるような声を出す。
- ・左右に振り、捕れるか捕れないかのボールを打ち続け、球際の勝負をする。
- ・必要があれば、途中で集合し、もう一度気持ちを入れさせる。
- ・終わった後は、山下先生自ら、「ようやった」と声をかけ選手に水を飲ませてあげていた。

(3) ノック指導、山下先生からいただいたアドバイス

- ①受講生それが5分程度のノックを打ち、山下先生から直すポイントや打ち方のアドバイスをいただいた。私自身は「ノックの打ち方はいい、でももうちょっと痩せろ」と声をかけていただいた。体重が重いと腰を痛め、ノックが打てなくなるからだと思う。
- ②ノックをやっていると、選手たちのバッティングがよくなる。下半身を使うから。
- ③選手に信頼される監督になる必要がある。
- ④1日3万本はノックを打つ。先のことも考えて、週一回は整体へ。
- ⑤練習試合はグラウンドと部室とトイレを観察する。トイレの汚い学校は不祥事が起きる。
- ⑥マネージャーにはトイレに花を飾らせていた。ちょっとした気配りができるように育てる。
- ⑦握手してみて、相手が本気かどうか知る。
- ⑧一番低くて険しい山はマウンド。投手には覚悟と自覚を持たせる。
- ⑨70%は投手の責任。投手は一生懸命走り込みをする。それを見て、野手は頑張ろうとなる。
- ⑩選手には丁寧に一人ひとり声をかける。

(4) 実技を通して感じたこと

先生方のアイディアのある指導や、基本的なことを徹底した指導はもちろん大いに勉強になったが、何よりも一番大切なことは技術論云々よりも、生徒とどう関わっているかということであった。一方的に厳しくするわけでもなく、かといって甘いわけでもない。選手の様子や反応をしっかりと観察して、的確な接し方をしているのが非常に参考になった。また、何かあれば逃さず声をかけていくという姿勢、また一番は甲子園というものが大前提にある実技指導であったと思う。モデルチームの選手たちは山下先生に初めて指導してもらっていたと思うのだが、まるで自分がずっと育ててきたかのようだったし、選手もそれに引き付けられているのがよくわかった。時間が経つにつれて、選手たちが最初よりも声が出て、明るくハツラツとプレーするようになっていったのが印象的だった。それは、山下先生が嘘偽りなく、本気で情熱を持って、選手たちにぶつかっていった結果だと思う。「本気は伝わる」ということが本当によくわかった。



9. 閉講式

(1) 馬場先生より

- ①伸びてくるチームはO F Fシーズンにどれだけ鍛えれるか。地道な練習になると思うが、この三日間で経験したことを生かして、春になつたら全然チームが変わったというチームになるように頑張って欲しい。
- ②指導者の力が問われる冬。

(2) 平川先生

- ①皆さんの思いや考えていることが自分を初心に帰させてくれた。
- ②日々成長するということは何歳になっても同じ。その心を忘れないようにして欲しい。

(3) 大藤先生

- ①結果を出す人は素晴らしいものを持っている。
- ②事を為すためには、その人の魅力や武器が無いと戦つていけない。甲子園に行くには武器が必要。
- ③十年後の自分がどうなっているか？金銭以外は大概のことは実現する。
- ④自分の思いはどんどん人前で話す。脳は馬鹿だ。本当のことか嘘のことかわからなくなる。
- ⑤甲子園でやって失敗したことは悔いが残っていない。やらずに失敗したことは未だに後悔している。
それはもしかしたら突き詰めて練習していなかったからかもしれない。

(4) 山下先生

- ①指導は情熱と愛。生徒たちの心にいかに火をつけるか。
- ②10年後、あの先生で良かったと感謝される先生になって欲しい。あの学校で良かったと思える高校生活を作つてあげて欲しい。
- ③世界に通用する人間を育てよう。

④花よりも花を咲かせる父になれ。



10. 終わりに

縁というものはとても不思議なものだと改めて感じました。17年前、高校二年生になる直前の3月。恩師の草間先生が長野県で教壇に立つ前に勤務されていたのが石川県の金沢桜丘高校で、その時の繋がりで山下先生が率いる星稜高校と練習試合をさせていただいたことがあります。星稜高校の強さは勿論、選手たちの挨拶のすごさ、礼儀正しさ、正真正銘の全力疾走など、同じ高校生ながら圧倒されたのを思い出します。また、試合後に山下先生のご自宅にある、数々の野球に関するトロフィーや賞状、記念品などを飾った部屋を見学させていただき、お話しも聞くことができました。その時、当時の私が指導者として甲子園塾に参加し、山下先生と再会するとは想像もしていませんでした。今回の甲子園塾で山下先生と再会できるのが非常に楽しみであったのは言うまでもありません。そして、山下先生の経験や考え、技術を学ばせていただき、あの時の星稜高校の強さの理由が分かったような気がします。本気は本物を育てる、そう思いました。加えて、山下先生自身もベトナムで野球を教え、道具を寄付されたという経験があることを聞き、私がスリランカで野球を教える活動をしていたことと、外国で野球を普及させるという点で共通点があり、その話ができたことも嬉しく思いました。

また、大藤先生や平川先生、馬場先生といった、素晴らしい講師の方々や受講生の方々、日本高校野球連盟の方々と知り合うことができ、非常に貴重な繋がりができました。その中には、私の高校の野球班の先輩と同じ大学で一緒に野球をやっていた方や、私の大学の先輩と同じ高校で一緒に野球をやっていた方など、どこかで繋がっている方々と出会うことができ、そこでも何か不思議な縁を感じました。人の出会いは一生の宝だと思うので、これからもその縁を大切にしていきたいと思います。そして、それぞれがそれぞれの場所で、それぞれのやり方で高校野球を盛り上げていき、そしていつしか夢の舞台で再会できることを楽しみにしたいと思います。それまで、私自身もこれからどれだけ自分を磨いていけるか、生徒ために力を尽くしていけるか、そして長野県高校野球連盟の方々や日本高校野球連盟の方々に恩返しをしていけるか、日々全力で取り組んでいきたいと思います。

さて、この甲子園塾を受講した三日間を通して強く感じたことがあります。それは、「人としてどう生きていかを常に突き詰め、悩み、失敗を生かし、生きていくこと」がこれからの私自身の人生で一番大切にしなければいけないということです。今回の甲子園塾講師の山下先生を初め、大藤先生、平川先生、

馬場先生、そして日本高校野球連盟の皆様の講義や話を聞く中で、どれだけ自分を高めようとしているか、どれだけ人を大切にしているか、そしてどれだけ強い思いを持っているかを知り、深く感動しました。私自身、今まで自分を磨こうとしてこなかったわけではありません。しかし、先生方の姿を見て、そして心に触れて、まだまだ甘かったと感じました。先生方の本気で生徒を育てようという姿、野球を通して生徒と自分自身を本気で磨こうという姿は、私が憧れていた姿そのものでした。しかし、憧れているだけでは何も変わらないということも知りました。講師の先生方がおっしゃっていた、「思つたらすぐに行動、全て行動」という言葉、「変わらなければ何も変えられない」という言葉。普段私自身も生徒に言っているのに、実際、自分自身の姿を先生方の姿と比べると、まだまだ足元にも及ばないことに反省をしなければなりません。そして、今感じている悔しさをどう生かすかが重要だと思います。”Live for noting or die for something.” という言葉がありますが、私の答えは”Die for something.” です。教育者として、生徒を育てること、自分を磨くことに尽力したいと思います。

最後に、このような素晴らしい研修に参加を認めていただいた長野県高校野球連盟の皆様に深く御礼を申し上げます。このような機会に恵まれたことを本当に幸せに感じております。レポートの冒頭の挨拶で申し上げた通り、私自身が監督として、強く、そしてしっかりとしたチーム作りをし、長野県の高校野球のレベルアップに繋げるという点で十分に貢献できていません。だから、これからもより一層尽力し、今まで支えていただいた分以上に、高校野球に恩返しができるように頑張っていきたいと思います。

また、甲子園塾という素晴らしい機会を提供してくださった、古谷さんを始めとする日本高等学校野球連盟の方々、山下先生を始めとする大藤先生、平川先生、馬場先生、モデル校をしてくださった兵庫県立尼崎工業の方々にも深く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

報告書作成者連絡先 (質問等ありましたらご連絡ください)

氏名 漆原 伸也

勤務先 長野県軽井沢高等学校 住所 〒389-0102 長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1323-43

電話 0267-42-2390 FAX 0267-41-1014

携帯 080-2026-8642